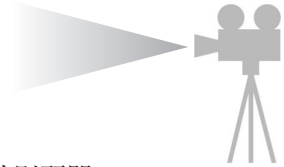




映画とその時代 ⑧



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

ロンドン五輪で国じゅうが沸き立った。4年に一度くり広げられるこの祭典は、素朴で自然なナショナリズムの発露や、民族それぞれの同胞意識の高揚の場である一方、(国家の威信)が陰に陽に顔を出してくる。

1964年の東京オリンピックは、どん底の廃墟から立ち直り、民族の誇りを取り戻す、まさに(坂の上の雲)だった。

ところがこの祭典は、思わぬ騒動を生む。五輪組織委の委嘱で製作された記録映画『東京オリンピック』の出来栄に、担当大臣の河野一郎氏が強い不満を表明して撮り直しを命じたのである。その言い分は、日本人選手の活躍や日の丸の感動を伝えるシーンが少な過ぎ、余計な被写体ばかり追いかけているというものだった。

この映画の監督は市川崑。『ビルマの豎琴』や『おとうと』『細雪』などの傑作群に見られるように、そのユニークな文体と個性を貫き通し、隅から隅まで手作りの映像世界を作り上げる、いわば職人気質の名匠だ。そしてこの監督の意欲をかき立てたものは、国威の発揚やスポーツの記録ではなく、期待の重圧に耐え、その一瞬にすべてを賭けるアスリートという(人間)であり、その言い知れぬ孤独感にあったようだ。その孤独感の共有がやがて民族の相互理解や連帯につながる。それこそがオリンピックというものだ。この映画は、

その主旋律が全編を流れている。

これでは双方の感性は噛み合いようがない。当然に映画監督協会は猛反発し、(記録)か(芸術)か、撮り直しの是非をめぐって世論は騒然となる。間もなくこの作品がカンヌ国際映画祭で受賞し、さらにひろく海外から賞賛の声が寄せられたことで、ようやくこの騒動は一応の結着になった。

しかしこの論争は、記録派も芸術派も、もうひとつの五輪記録映画の鮮烈な記憶が、その背景にあったと言えるだろう。

それは1936年のベルリン五輪を映像化した『民族の祭典』だ。当時日の出の勢いにあったナチスが、その総力をあげて壮大な五輪を演出し、ドイツ民族の誇りを映像世界を通して高だかとアピールした。日本での公開は1940年の第二次大戦のさなか。全欧州を制圧しつつあった同盟国。全国の小学生を始め、おそらくこれほど津々浦々の日本人がシビれた映画はないだろう。

全編を貫く秩序美、様式美、そのカッコよさ。競技は種目ごとにテイストを変え、それぞれ絶妙なモンタージュでひとつの映像詩に仕立て上げられている。不世出の鬼才とされる女流監督レニ・リーフェンシュタールは、まさに(国威発揚)も(記録)も、見事に(映像芸術)として後世に残した。—————